

満州に置き去りにされた在留日本人

1945年(昭和20)8月9日未明、ソ連軍は突如、日ソ中立条約を踏みにじってソ満国境を越えて、なだれを打って攻め込んできました。また同時に、侵略者に苦しめられていた満州現地人が土地と家を奪い返すために、各地で開拓民を襲撃しました。

当時「満州国」には、“根こそぎ動員”で訓練不十分で装備劣弱な関東軍兵士のほかおよそ155万人もの日本人が住んでいました。このうち22万3千人が開拓移民でした。

《関東軍本隊はすでに満州南部に後退 そのことを開拓民には知らせず》

関東軍は、ソ連の対日参戦を事前に察知しながら、なんの事前の対策もうたず、逆に満州を放棄し、総司令部を新京から朝鮮国境に近い通化(つうか)へいちはやく後退させ、在留日本人を置き去りにしました。しかもそのことを開拓民にはいっさい知らせず、逆に8月2日、「関東軍の体制は盤石の重きにある。開拓団の諸子は安んじて生産に励むべし」との関東軍声明が流されていました。だから開拓民の誰しも最後まで関東軍が守ってくれると信じて疑いませんでした。

《「根こそぎ動員」で開拓団には 女子・子ども・老人だけ》

しかもソ連侵攻の直前、7月末までに在満男子17歳~45歳までの全員が20万人も“根こそぎ動員”されていました。関東軍が後退した穴埋めにソ満国境の整備に当たらせるためでした。「開拓団員は兵役免除」の約束は完全に破られました。開拓民は27万人でしたが、男子が現地召集(4万7千人)され、残されたのは女・子ども・老人ばかりの22万3千人になっていました。開拓民は完全に後ろ盾をなくし、ソ連軍の日本人非戦闘員にたいする殺傷・略奪・暴行・強姦などの襲撃に身をさらす生き地獄の逃避行を余儀なくされ、おびただしい数の犠牲者を出しました。全体の在留日本人のうち開拓民の高い死亡率にはっきりと示されています。

《ソ連の満州侵攻時の在留日本人と 逃避行中の死者者》

	死亡者	死亡率
在留日本人全体	155万人	約176000人 11.3%
うち開拓民	22万人	約8万人 36.3%
うち新潟県	1万3千人	4980人 38.4%
(開拓民は全体の在留日本人の14%なのに、死亡者は全体の約50%近い。)		
(高橋健男著『赤い夕陽の満州にて』より)		

関東軍はソ連侵攻と同時に、 満州南部に守備線を縮小

開拓団の死亡率が極端に高いのは、女・子ども・年寄りだけが残された開拓民が、ソ連軍の攻撃と中国人の襲撃に遭遇したり、逃避行中や越冬期間中に餓死や病死、さらには集団自決にまで追い込まれたりしたからでした。

大本営陸軍部命令(大陸令)



1944年9月18日に大本営陸軍部命令(大陸令)の内容は、弱体化した関東軍には、ソ連軍の大攻勢を国境線で食い止めることはもはや不可能と判断し、「満州」の5分の4を放棄し、新京・図們(ともん)を結ぶ京図線以西と、新京大連間を結ぶ連京線以南、「北鮮」の山岳地帯を含む地域を持ちこたえるというものでした。さらに許せないことは、「大陸令」の第3項に、「戦後将来の帝国の復興再建を考慮して、関東軍総司令官は、なるべく多くの日本人を大陸の一角に残置することを図るべし。之が為、残置する軍、民、日本人の国籍は如何様にも変更するも可なり」とありました。「ポツダム宣言」受諾を決定した1945年8月14日、日本外務省が発した「3カ国宣言受諾に関する訓電」でも、「居留民はできる限り現地に定着させる方針」を指示していました。現地農民の積年の恨みが日本人に向けられるなかで、「現地定着」は机上の空論といえました。